

～多収穫栽培のポイントについて～

水田活用米穀として、多収性品種の栽培が広がっています。
多収穫栽培のポイントについてご紹介させていただきます。

1. 栽培のポイント

(1) 適正生育量の確保

ポイントは以下の5点です。

○適正な基肥量、穂肥量を施用しましょう。

○耕深15cmを確保しましょう。(根の健全な発達により籾数を確保)

○田植え時期を守りましょう。

田植えの目安は、「新潟次郎」は5月上旬、「あきだわら」は5月10日前後、
「いただき」は5月中旬です。

※遅植えの場合、早生品種は稲体が大きくなる前に出穂してしまい、
晩生品種は低温条件下で登熟するため登熟不良の恐れがあります。

○適正な栽植密度で田植えを行いましょう。

「新潟次郎」「あきだわら」は m^2 当たり18株(60株セット)以上、
「いただき」は m^2 当たり15～18株(50～60株セット)が目安です。

○穂肥は2回に分けて、目安の窒素分量(3kg/10a)を確実に施用しましょう。
特に籾数確保のため、1回目の穂肥は遅れずに施用することが重要です。



【1回目の穂肥時の生育めやす】(幼穂形成期頃)

品種	時期 (幼穂形成期)	草丈 (cm)	茎数 (本/ m^2)	葉色 (SPAD)
新潟次郎	7月1～3日頃	60～64	520～550 (28～30)	41～43
いただき	7月15～18日頃	70～75	400～440 (22～25)	40～42
あきだわら	7月20日頃	80～85	410～430 (23～24)	35～37

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。

(2) 防除の徹底

- 施肥窒素量が多い場合、いもち病が多発しやすくなるため、育苗箱施用による葉いもち防除・穂いもち予防防除を必ず行いましょう。
- 粃米のまま、もしくは粃殻を含めて家畜に給餌する場合は、出穂以降の農薬の散布を控えましょう。

2. 収穫・収量について

(1) 収穫適期

- 黄化粃割合が85～90%になった頃が収穫の適期です。
- 出穂後の積算温度の目安は、「新潟次郎」が1000℃、「いただき」が1000～1050℃、「あきだわら」が1050～1100℃です。

(2) 収量構成要素

- 収量構成要素は以下が目安です。

品種	目標収量 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	一穂粃数 (粒)	m ² 粃数 (千粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
新潟次郎 (極早生)	700	410～450	90～96	39～41	80	21.5～22.5
いただき (晩生)	700	340～370	94～102	35～37	80～85	23.3～24.0
あきだわら (晩生)	800	370～390	112～116	43	85	22.0
(参考) コシヒカリ一般	540	380	75	28	90	22.0

※ 栽培暦（暫定版）より

多収性品種の栽培は土壌養分を収奪しやすいため、堆肥や土づくり資材、もみ殻の施用などを適宜行いましょう。

ケイ酸、カリウムの還元のため、稲わらの秋すき込みも有効です。

また、新潟次郎は出穂が早いので、雀害対策を適宜実施しましょう。

栽培目安を守り、多収穫を目指しましょう！

(担い手・営農支援部 担い手・営農支援課)

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。